

SEA TO SUMMIT for Children in KIBI

日数	日付	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
1日目	9/21 (土)				受付	海のステージ (カヤック)			昼食	オリエンテーション	環境学習			入室	夕食 休憩	振り返り	入浴	就寝準備	就寝
2日目	9/22 (日)	就寝	起床 洗面 清掃	朝食	点検 退所準備	移動		入室	昼食	里のステージ (マウンテンバイク)	環境学習			夕食	振り返り	入浴	就寝準備	就寝	
3日目	9/23 (月)	就寝	起床 洗面 清掃	朝のつとめ	朝食	点検	山のステージ (ハイキング)		昼食	環境学習	振り返り まとめ	閉会式							

(2) 活動の状況



【海のステージ(カヤック)】



【環境学習①】



【里のステージ(マウンテンバイク)】



【環境学習②】



【山のステージ(ハイキング)】



【ゴール】



【環境学習③】



【発表】

4. 成果・課題

(1) 満足度

満足 92%、やや満足 8%

(2) 参加者の声

- ① 水が海、里、山とすべてにつながっていることがわかった。自然の中で活動すると、より深くそのことを感じられた。
- ② 住める生き物が水のきれいさによって違っていることがわかった。また、人間の行いによって自然界の生き物の生活が脅かされているということもわかった。
これからはSDGsを頭の隅において生活していきたい。
- ③ 一つ一つのステージを乗り越えることで、仲間の大切さやあきらめない心を学ぶことができた。そして、どのステージも景色が素敵で楽しかった。
- ④ 普段の生活では感じることができない空気、においを体で感じることもできた。

(3) 成果

- ① 本事業は活動の準備等、見えないところでの職員の動きが多く必要である。全所体制で行うことで、しっかりと準備をすることができ、参加者の活動をスムーズに行うことができた。

また、山のステージでは、その日に出勤している職員を全員チェックポイントに配置した。参加者へは、チェックポイントで全職員からサインを集めるというミッションを与えた。参加者にとってたくさんの職員と触れ合うことは楽しみであったことが参加者の反応から分かった。

森林インストラクターの資格をもつ職員のチェックポイントでは、実験を行った。落ち葉や木の枝が土の中にあることが保水性につながること分かり、緑のダムについて理解できるようにした。その後のハイキングで、山を見る際の視点を持つことができた。

また、レクリエーションが得意な所員のチェックポイントでは、グループの絆が強まる時間を過ごした。参加者を楽しむことができるように各職員が工夫をし、全所体制で教育事業がより良くなるようにした。



【山をモデルにした実験】



【レクリエーション】

- ② 熱中症の心配はなく、適温のもと各ステージの活動を行うことができた。風を感じながら景色を楽しんで活動に取り組み、心地良く自然を楽しむ姿が見られた。活動に適した気候で実施することは、参加者が安全に過ごすことができただけでなく、活動の質の向上にもつながった。
- ③ その後の環境学習で水質検査を行うことで、海のステージではカヤックを楽しむとともに、渋川海岸の水質を調べるために海水を採取するという目的意識をもたせ、つながりのある活動となった。
- ④ 環境学習では、専門的な知識をもつ講師と連携することで普段経験できない実験を行うことができた。日常生活と関連付けることで興味を持つことができただけでなく、終わってからも「水を大切にしたい。」という感想が多く聞かれた。
- ⑤ 各ステージを終え、環境学習の学びの後に振り返りの時間を設けた。アウトプットをする手段として模造紙に学びをまとめることを中心としたが、時間を多く取ることができないことが計画段階から予想された。限られた時間で全員が役割を果たすために、付箋や家庭用プリンターを活用することで活発なアウトプットが行うことができた。



【振り返り時間に作成された成果物】

また、山のステージではグループごとにコースをめぐるようにした。グループで地図を囲みながら山中を歩くことで、声を掛け合い周りの自然を意識しながらゴールを目指すことができた。

- ⑥ 受付時にSNSの二次元コードを配布し、保護者が随時活動を知ることができるようにした。SNS担当の職員が魅力的な内容を考え、山のステージのゴールではライブ配信をすることで、生き生きと活動をする姿を伝えることができ、保護者にとっても安心感につながった。参加者や協力団体を通じて約30人のInstagramのフォロワーを増やすことができた。

(4) 今後の課題

「令和7年度 SEA TO SUMMIT for Children in KIBI」には、今年の参加者も参加することも考えられる。そのため、プログラムが前年度踏襲になるのではなく、より魅力的な内容になるように連携する講師や実行委員とブラッシュアップした内容になるように企画したい。

担当：企画指導専門職 八木 雄治